

(様式2)

令和7年度吉田・飯塚・長瀬基金調査研究事業実績報告書

報告日 令和 8 年 4 月 17 日

社会福祉法人 北海道社会福祉協議会
会 長 塚 本 泰 司 様

下記のとおり報告します。

(フリガナ) 団体名又は 代表者氏名	(ホッカイドウシセツソーシャルワークケンキュウカイ) 北海道施設ソーシャルワーク研究会		
住 所			
電話番号		ファックス	
調査研究課題	知的障がい者施設におけるソーシャルワーク実践の検討 -実践モデルの開発と試行-		
実施期間	令和 7 年 6 月 1 日 ~ 令和 8 年 4 月 17 日		
研 究 員	氏 名	所 属	
	代表者 柴田祐樹	北星学園大学 大学院 社会福祉学研究科・大学院生／社会福祉法人北ひろしま福祉会 めーでる 相談員	
	研究員 中村和彦 小黒康廣	北星学園大学 大学院 社会福祉学研究科・教授 社会福祉法人侑愛会 ワークセンターほくと・施設長	
	多賀昌江	北海道文教大学 医療保健科学部・准教授	
目 的	本研究は、知的障害を伴う自閉スペクトラム症者を支援する障害福祉サービス事業所職員のソーシャルワーク専門職性の実態を明らかにすることを目的とした。施設実践では、相談援助と直接支援が重なり合って展開されるため、サービス管理責任者だけでなく生活支援員も対象に含めた。あわせて、施設職員の専門職性の構造と特徴を把握し、今後の施設ソーシャルワーク実践モデルの検討に資する基礎資料を得ることを目指した。		

記載上の留意事項

- 1 「目的」、「実施方法」、「結果の概要」は、各々300字程度にまとめて記述する。
- 2 その他参考事項については、今後、更に継続して研究が必要な場合に記載する。

実施方法	知的障害福祉協会加盟事業所のうち無作為抽出した 1,270 事業所を対象に、郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した。各事業所には、サービス管理責任者 1 名、生活支援員 1 名への回答を依頼した。質問票は、南・武田 (2004) のソーシャルワーク専門職性自己評価尺度 (SWPI) 42 項目に、年齢、性別、職種、保有資格、施設種別、勤務年数、相談援助業務経験年数等の基本属性項目を加えて構成した。回収後は、データ入力、欠損確認、基礎集計を行い、あわせて尺度の内的一貫性の確認、因子分析および類型化に向けたデータ整理を進めた。
結果の概要	有効回答は 652 件であった。分析の結果、施設職員全体では、使命感、倫理性、専門的スキルは比較的高い一方、専門職団体との関係および教育・自己研鑽は低い傾向がみられた。生活支援員とサービス管理責任者の比較では、サービス管理責任者の方が専門職性自己評価は高かったが、生活支援員においても使命感や倫理性は比較的高かった。さらに、因子分析では、専門職性は全般的自己評価、専門職的学習・所属継続性、使命感・価値認識の側面から把握しやすいことが示唆され、施設職員の専門職性が、知識や技能のみではなく、学びへのつながりや仕事への価値づけも含んでいる可能性がうかがわれた。
効果	本研究により、障害者福祉施設におけるソーシャルワーク実践を、サービス管理責任者のみの課題としてではなく、生活支援員を含む施設職員の実践との関連において捉える視点が得られた。特に、生活支援員においても使命感や倫理性が比較的高かったことは、日常的支援のなかにソーシャルワークの価値や倫理に接続しうる側面が含まれる可能性を示している。また、サービス管理責任者との比較を通して、役割差や学習機会の差が専門職性の形成に関わる可能性も見えてきた。今後の研修、スーパービジョン、組織的支援のあり方を検討するための基礎資料を得たことが、本研究の主な効果である。
その他参考事項	本研究は探索的分析ではあるが、生活支援員とサービス管理責任者の双方を対象に、障害者福祉施設における専門職性の構造と特徴を把握する基礎資料を得た点に意義がある。一方で、因子構造や類型の妥当性にはなお検討の余地があり、ASD 支援経験との直接的関連も今回の調査では十分に把握できていない。今後は、実践内容をより直接的に捉える質的研究や追加調査を行い、施設ソーシャルワーク実践モデルの具体化と試行的検討を進める必要がある。